

新見公立短期大学附属図書館の利用実態と課題

— 学生・教員へアンケート調査を実施して —

逸見 英枝^{1)*}・金山 時恵²⁾・新藤 慶³⁾

1) 看護学科 2) 地域看護学専攻科 3) 幼児教育学科

(2010年11月17日受理)

新図書館が稼働し2年間が経過した。学生と教員へのアンケート調査から利用実態と課題を明らかにした。学生は図書館を学習場所として、教員は本の利用、資料の取り寄せのために週1日程度利用している。利用している資料は学術専門雑誌が多い。そのためそれらの充実を図り電子ジャーナルの導入について検討を行い、図書館の利用促進を図っていききたい。情報サービスについては十分に浸透していないことから、広報活動がさらに必要である。施設・設備に関しては、適切な学習環境として整備されているが、照明とバリアフリーについての評価が低く、検討が望まれる。図書館職員のサービスは高く評価され、学生は図書館を身近に感じている。

今後、利用者の意見を定期的に取り入れながら、利用者と共にある図書館として充実させていきたい。(キーワード) 利用実態, 図書館づくり, アンケート

はじめに

本学での新図書館が新見市学術交流センター内に新見公立短期大学附属図書館という名称(2010年度からは新見公立大学・短期大学附属図書館と変更)で稼働し2年が経過した。

念願であった開館時間の延長や土曜日・日曜日の開館、あるいは閲覧席の増加、学習室の設置、自動貸し出し装置の装備、検索システムの整備等々これまで課題であった様々な点について改善や導入がなされ、さらに学外者に対しても解放されるようになった。

司書等の人員も限られており、また以前の図書館に比し面積も広く冷・暖房、照明など経済的負担も考えられ工夫をしながらの運営である。このように限られた条件の中ではあるが、利用者の期待に添うような図書館でありたいと日々努力をしている昨今である。

図書委員会では、新図書館の利用に関することや機能面、環境面等を中心にアンケート調査を行うこととし取り組んだ。大まかな結果については今年度の本学年報に載せているが、さらに結果を分析し今後の図書館運営についての課題を明らかにしたので報告する。

なお、事務職員、学外利用者にもアンケート調査を行ったが今回は学生と教員のみ結果を報告する。

I. 調査目的

新見公立短期大学学生と教員の図書館利用に関する実態を分析し、図書館の充実を図るための一助とする。

II. 研究方法

- 1) 調査対象：幼児教育学科、看護学科、地域福祉学科、地域看護学専攻科の全学生と全教員。学生総数419名のうち回収数は349名(回収率83.3%)、教員配布総数37名のうち回収数34名(回収率91.8%)
- 2) 調査方法・内容：図書館利用・目的、図書館情報、環境等についてアンケートを実施。学生と教員をそれぞれ分析した。
- 3) 調査期間：2010年1月20日～2010年2月26日

III. 倫理的配慮

調査対象者に、調査目的及びアンケートは無記名であり、データは統計的に処理し個人が特定されることはないことを口頭及び文書で説明し、協力を求めた。

*連絡先：逸見英枝 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

IV. 学生の図書館利用状況

1. 学生の概要

学生の総数419名のうち、回収数は349名、回収率83.3%であった。

2. 附属図書館の利用状況

図書館の週平均の利用では、「週1日未満」が43.8%ともっとも多く、次いで「1日」19.8%であった(図1)。「利用しない」は7.2%にとどまっていた。全体として、利用している学生が多い。

土・日曜日の利用では、「あまり利用しない」が42.5%ともっとも多く、「まったく利用しない」は8.9%であった。さらに、長期休暇時の週平均の利用では、「利用しない」が67.0%ともっとも多かった。

図書館を利用する目的(複数回答)では、「個人学習」が18.8%、「本の利用」が18.0%、「グループ学習」が14.6%となっており、学習のための利用が多いことがわかった(図2)。一方、「視聴覚資料を見る」「資料相談」はほとんど利用されていなかった。これは、学生の空き時間が十分に活用されていないことや空き時間が少ないことが考えられる。

図書館で利用できる資料の認知度(複数回答)では、「一

般雑誌」22.6%、「新聞」が20.9%、「文献検索」が14.5%であった(図3)。では、実際に利用している資料(複数回答)では、「学術専門雑誌」が22.8%ともっとも多く、次いで「一般雑誌」が20.5%、「以外の図書」が17.9%の順であった。しかし、設置されている資料の数については、「適当である」としたものが8割を超えているが、「絵本の数が少ない」「専門書が少ない」「実習前になるとほとんどなくなる」などの声が聞かれた。また、学術専門雑誌なども活用されているが、その充実を望む声もあることからさらなる専門雑誌の拡充が望まれる。

図書館で利用できるサービスの認知度では、「資料複写」が22.1%ともっとも多く、次いで「貸出予約」が21.2%、「資料取寄」「市内図書館への本の返却」「県内資料取寄」の順であった(図4)。一方で、「県立図書館インターネット予約資料受取」については認知度が低いことがわかった。今後、入学直後に行う図書館オリエンテーション時や掲示板などを活用して周知していく必要がある。

書籍検索の主な方法では、「OPAC」が57.8%ともっとも多く、次いで「直接書架を探す」が25.8%、「職員に相談」が15.7%であった。学生の半数は「OPAC」の使用を理解し活用していることがわかった。これは、日ごろの教員の教育、研究指導などによるものといえる。しかし、「岡山區

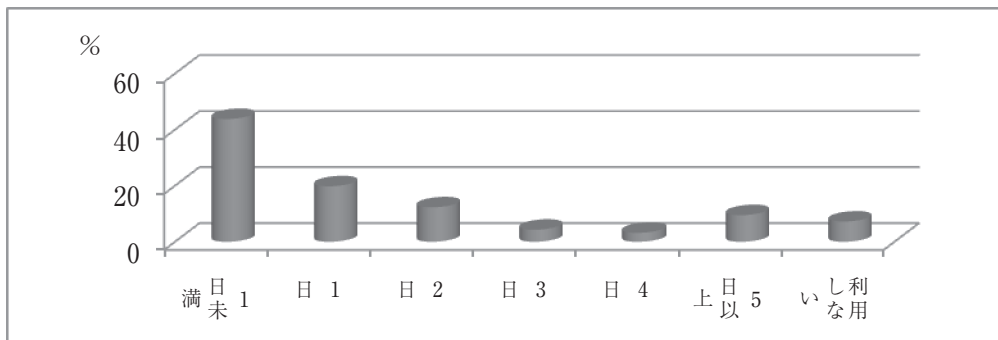


図1 週別利用状況

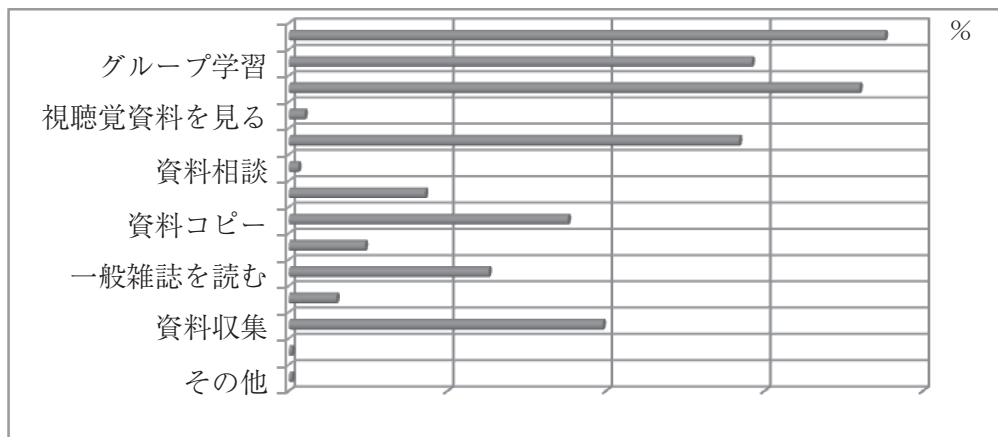


図2 利用の目的(複数回答 n=349)

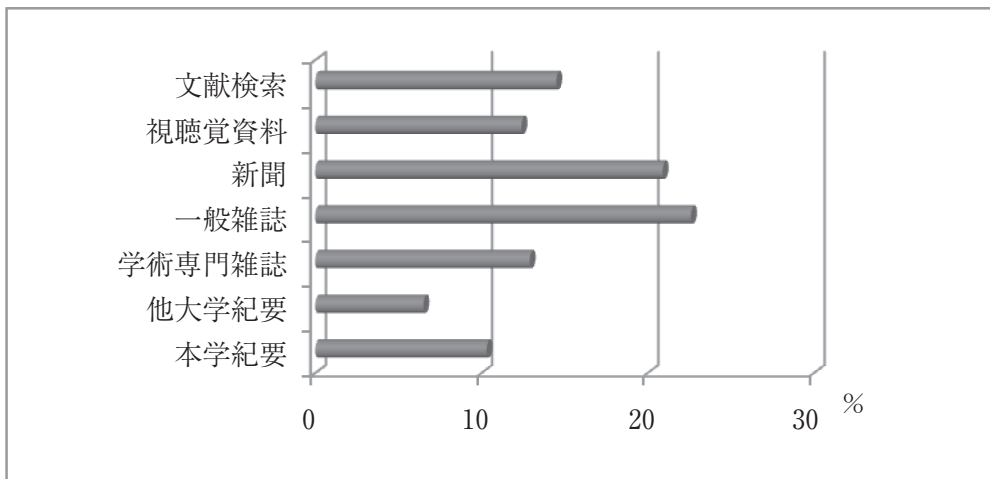


図3 利用できる資料の認知度 (複数回答)

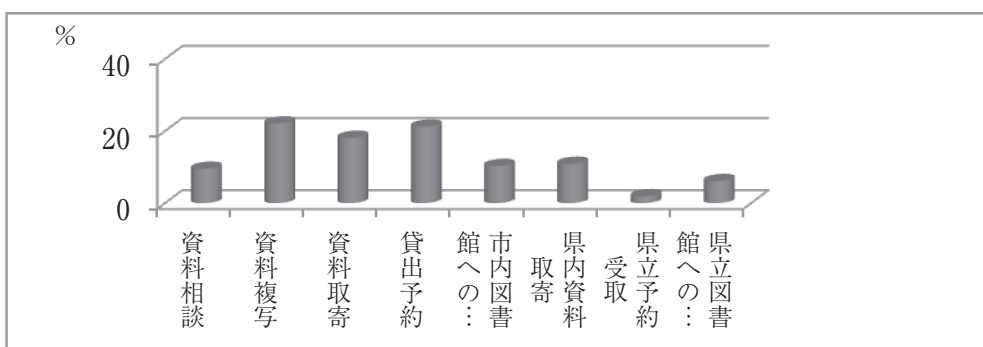


図4 サービスの認知度

「横断検索システム」についてはほとんど利用されていないことがわかった。

今後は、学生と教員に対して随時最新の情報について周知を行い利用の促進の充実を図ることが必要と思われる。

3. 図書館の情報利用について

図書館では、毎月1回シアターの鑑賞などを行い、本の利用以外に図書館利用を図っている。その中でシアターなどの認知度では、「知らない」が85.6%であり、ほとんど認知されていないことがわかった。学生は講義が18時までぎっしり詰まっていることなどが要因で参加できないものと考えられる。また、シアター鑑賞では、「興味関心があれば観たい」等の声が多く、その内容についての自由記載では、「看護医療系」「子ども関係」「福祉系」など各学科の専門関係のものを挙げていた。今後は、広報のあり方を検討し、学生の興味関心の高い内容を検討する必要がある。

図書館内・外から図書館ホームページへのアクセス利用(複数回答)では、いずれも「OPAC」がもっとも多く、次いで「文献検索」「メディカルオンライン」の順であった。

ホームページにアクセスしない理由(複数回答)では、

「図書館に直接出向けば十分だから」が28.4%ともっとも多く、次いで「インターネットが使えるパソコンがないから」22.1%、「図書館ホームページがあることを知らなかったから」21.8%の順であった。2割の学生はホームページがあることを知らないということが明らかになった。また、図書館オリエンテーション時の図書館の利用案内の参考度では、「まあまあ参考になった」が58.3%、「あまり参考にならなかった」が23.6%であった。

図書館の利用情報の告知方法についての自由記載では、「各学科の掲示板に貼る」「各教室に貼る」「食堂などの人の集まる場所に貼る」「学内放送をする」「メール」などの意見がみられた。学生は、本の利用などで図書館には出向いているが、利用内容としてはレポート課題や実習課題、卒業研究などの特別な学習のための利用にとどまっているように思われる。図書館の情報を館外からも利用できることを、より広く周知できるよう、学生が考える広報の方法を取り入れながら情報利用の促進を図る工夫が今後求められる。

4. 図書館備え付けのパソコン利用について

備え付けのパソコンの利用は、ほぼすべての学生が利用

していた。その利用目的は、「インターネット検索」が55.9%と最も多く、次いで「OPAC」が33.1%であった。利用時間帯では、「放課後」が47.5%と最も多く、次いで「講義の空き時間」が34.8%であった。また、その利用時間も「10～30分未満」が39.4%と最も多く、「10分未満」が12.3%であった。10分未満の利用という利用内容の詳細は不明ではあるが、レポート課題などのインターネット検索や新聞閲覧などが推測される。一方、備え付けのパソコンを利用しない理由では、自分のパソコンや情報処理室のパソコンを使用しているものが多かった。またその他の理由では、「使い勝手が悪い」「図書館へ行くまでが面倒」「空きのパソコンがない」などの理由もみられた。図書館の備え付けのパソコン台数は限られているため、学生の使用環境として適切なパソコンの台数を確保することも必要ではないかと考える。

5. 図書館全体の環境について

図書館の施設・設備は、9割の学生が「適当である」と評価していた。しかし、照明については、特に評価が低かった。その理由には、「1階が暗い」「学習スペースが暗い」「暗くならないと電気がつかない」などの意見がみられた。さらに、静かさについては、「私語が多い」「普通に話をしていても注意をしない」「話し声が気になる」などの意見がみられた。今後は利用時のマナーについての指導が必要である。これは、図書館利用だけに限らず、公共施設・機関でのマナーやルールとして認知されるべきことと考える。この点については、教員と図書館司書が共通の認識をもって指導を進めることが重要である。

また、冷・暖房では、7～8割の学生が「適当である」としているが、特に暖房では2割の学生が、「1階の学習場所」「1階の窓際」などの箇所について評価が低い。さらに、「ガラス張りなのでなかなか暖まりにくい」「寒すぎて勉強に集中できない」などの意見もみられた。何らかの対応は必要ではあろうが、長期的な視点での対策を考える必要がある。

机・椅子の数では、およそ8割の学生が「適当である」としている。一方で、「学習スペースが少ない」「数が少なくて座れない」「隣との距離を開けてほしい」などの要望も聞かれた。これまで、学習スペースが十分に確保されていなかったことを考慮して、新図書館では準備された経緯があるが、学生にとっての学習スペースの確保には今後も工夫が必要である。グループ閲覧室なども効率よく使用できるよう、学生への協力と共同への理解を得ていく必要がある。

文献検索データベースのサービス内容では、およそ9割の学生が満足していたが、「在庫の数は確認できるが場所の特定が適当」「本のある場所がわかりにくい」「ホームページを見た時目立たない」など適当でないという意見がみられた。

設置されている資料の数では、6割の学生が「適当である」としているが、「絵本が少ない」「実習前になるとほと

んどなくなる」「専門書が少ない」などの意見がみられた。

また、資料の配置では9割の学生が適当であるとしているが、「掲示がわかりにくい」「パソコンで探した場所がない」などの意見もみられた。

さらに、施設・設備のバリアフリーの程度では、9割の学生が適当であるとしているが、「階段が危ない」「エレベーターがいつも使えない」「車椅子の人は1階に行けない」など、使いにくい点を挙げていた。

開館日や開館時間では、適切で利用しやすいとおおむね評価できるが、「祝日も利用可能にしてほしい」「開館時間を早めてほしい」「休日も時間を延ばしてほしい」などの意見がみられた。これまでも、開館日や開館時間についての検討は行ってきたが、今後も学生にとって最良の学習環境の支援提供を検討していく必要がある。

さらに、学生の9割以上のものが総合的に学習環境として適切であると評価していた。利用しやすい点として、「学内にあるから行きやすい」「わからないことがあると快く丁寧に教えてもらえる」「静かで落ち着いた雰囲気です学習しやすい」などの意見がみられた。適切な学習環境として整備されていると評価することができる。しかし、一方で、「学習スペースに仕切りがあったらよい」「集中して勉強したいときに騒がしい」「資料ばかりで小説が少ないので増やしてほしい」「専門書がほとんど1階にあること」「飲食可能なスペースが狭い」「3号館から少し遠い」など利用しにくいとする意見がみられた。利用しにくい点については、学習環境としての整備と学生自身に対する利用時のマナーの指導について整理することができる。学習環境としての図書館の充実については今後検討を行い、改善できる点については早急な対応が求められる。

図書館職員の業務対応については、「優しい雰囲気です話しかけやすい」「親切」「丁寧」など高く評価している。図書館は本の利用ということだけにとどまらず、一緒に本などを探してもらうことで図書館を身近に感じることができるものと思われる。また、「挨拶を一人ひとりにしてくれるので気持ちよく利用できる」としているように、一見無機質な図書館という印象から、声かけがあると気持ちよと感じることができる。このようなつながりから、学生は利用しやすい図書館として認識を高め、今後の利用がさらに促進される重要な要素であるといえる。

6. 小括

最後に、学生の図書館の利用状況について、以下のようにとまとめることができる。

1) 図書館を学習場所として、週平均1日程度、土・日曜日は月1～2回利用していた。また、開館日や開館時間は適切で利用しやすいと評価していた。

2) 利用している資料は、学術専門雑誌、一般雑誌が多く十分に活用されているが、資料の種類不足などその充実を望む声もあることからさらなる専門雑誌の拡充が望まれる。

3) サービスの認知度では、OPACの利用が多いが、県立図書館インターネット予約資料受取は認知度が低かった。また、岡山県横断検索システムはほとんど利用されていないかった。入学直後に行う図書館オリエンテーション時や掲示板などを活用して周知していく必要がある。

4) 図書館の環境は適切であると評価されたが、照明やバリアフリーについての評価は低かった。しかし、図書館職員の業務対応については高い評価を得ていた。

以上、学生にとって、図書館は身近で利用しやすく、適切な学習環境として認識され利用されているとおおむね評価することができた。今後も、学生により適切な学習支援ができるよう創意工夫を重ねていくことが必要である。

そして、学生の意見や要望を定期的に把握し図書館のあり方を模索していくことが求められる。

V. 教員の図書館利用状況

1. 図書館利用の状況

続いて、教員の図書館利用状況を見てみたい。

まず、図書館利用の頻度を見ると、「週1日未満」と「週1日程度」がともに41.2%と、もっとも多くなっている。つまり8割以上は、週1日利用するかしないかといった程度であることがわかる。

続いて、土曜日・日曜日の利用状況を見ると、50.0%の教員が「まったく利用したことがない」と回答している。次いで、「利用したことはあるが、あまり利用しない」が38.2%、「月に1回くらい利用する」が11.8%となっており、月に2回以上利用するものは皆無である。休日であるため仕方がないが、土日の図書館はほとんど教員には利用されていないことがわかる。

それでは、教員たちはどのような目的を果たすために図書館を利用しているのだろうか。この点をまとめた図5を見ると、もっとも多いのが「本の利用」で79.4%、次いで

「資料取り寄せ依頼」が58.8%、「学術雑誌を読む」が55.9%、「資料を集める」が41.2%となっている。来館時の図書館資料の利用頻度を見ると、「いつも利用する」が25.0%、「ときどき利用する」が53.1%となっており、8割程度の教員が図書館では何らかの資料を利用しているが、ここで利用される資料は本や学術雑誌などの書籍資料が中心であることがわかる。

一方、「視聴覚資料を見る」「県立図書館インターネット予約資料受取」「放送大学利用」については、まったく利用されていないことがわかる。これらから、教員は図書館では書籍資料を中心に利用していること、その反面、視聴覚資料や放送大学の教材などは利用されていないことがわかる。

ただし、教員たちが書籍以外の資料が図書館で利用できることを知らないわけではない。図書館で利用できる資料の認知度をまとめた図6を見ると、すべての項目で9割以上の認知度を誇っていることがわかる。しかし、実際に利用している資料を掲げた図7からは、「学術専門雑誌」が83.3%、「他大学紀要」が55.6%であるのに対し、「視聴覚資料」は皆無である。また、そもそも図7に掲げられているような資料を利用しているという教員自体も18人（回答者全体の52.9%）にとどまっている。これらのことから、教員たちは書籍以外の資料について、その存在を知らないわけではないのに、利用が進んでいないことがわかる。たとえば、特に書籍以外の資料の充実度が低いなど、別の利用を妨げる要因が関わっているのではないだろうか。

さて、書籍を探す際に用いる主な方法を見ると、「OPAC」がもっとも多く51.5%、次いで「直接書架を探す」が30.3%となっている。つまり、目当ての本の所蔵場所をOPACで確認してから利用するか、書架を見ながらいろいろな本を探していくかのいずれかが取られることが多い。一方、「図書館職員に相談」は15.2%にとどまり、「岡山県横断検索システム」はまったく利用されていない。これらの探索方法

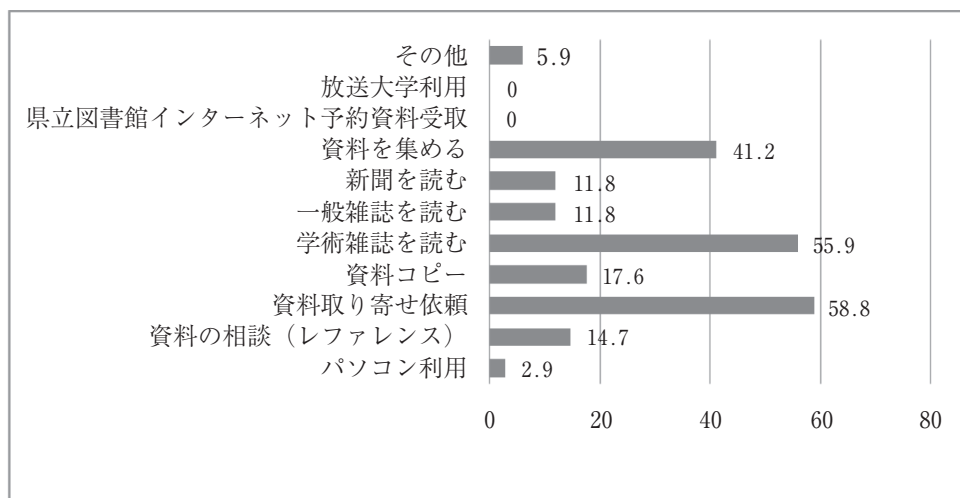


図5 図書館利用の目的 (複数回答, N=34)

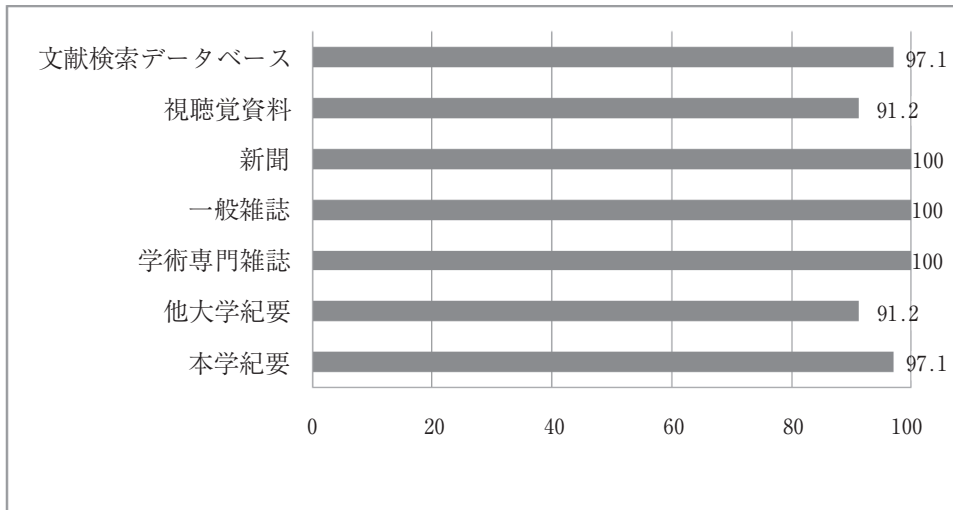


図6 図書館で利用できる資料の認知度（複数回答，N=34）

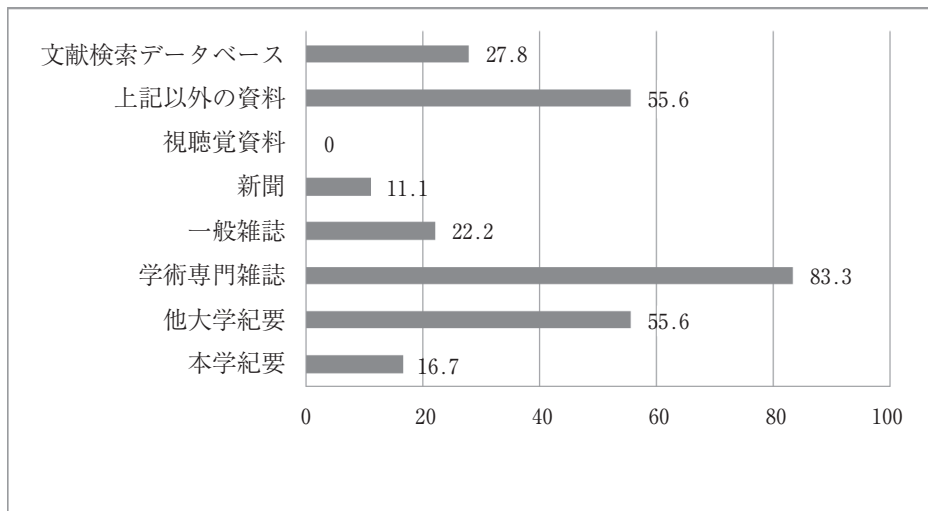


図7 図書館で利用している資料（複数回答，N=18）

によって得られる資料もあるだろうが、あまり利用されていないのが実状である。

続いて、図書館で利用できるサービスの認知度を、図8にまとめた。これを見ると、「他大学等からの資料の取寄せ」が100.0%、「管内資料複写」が90.9%、「資料の相談」が81.8%など、提供されているサービスの認知度は高い。しかし、「新見市内図書館間の相互返却サービス」と「県立図書館インターネット予約資料受取」が33.3%、「県立図書館の本の返却サービス」が30.3%など、他の公共図書館との間に結んでいる相互利用サービスについては、相対的に認知度が低くなっている。このような公共図書館との関係は、本学の図書館が、本学の附属図書館としてだけでなく、新見市学術交流センター図書館としての機能も併せ持つことに基づいているが、これが教員には十分に浸透していないことがうかがえる。

2. 図書館情報へのアクセス

それでは、本学附属図書館が外部に向けて発信している情報に、教員はどの程度関わっているのだろうか。まず、月1回の上映会である「交流センターシアター」の認知度を見ると、「知っている」と答えた者は32.4%にとどまっており、認知度は決して高くない。ただし、今後の鑑賞希望を見ると、「興味関心がある内容であれば観たいと思う」が79.4%に達しており、関心が低いわけではないこともわかる。

そこで、どのような内容に興味関心があるかを見ると、映画（洋画）やドキュメンタリーなどが挙げられている。ただし、「交流センターシアターの目的が不明なのでどのようなものが適しているかわからない」との声も聞かれた。交流センターシアターが、どのような目的で誰を対象としたものなのかが明確になってくことで、参加者も増えてくるかもしれない。

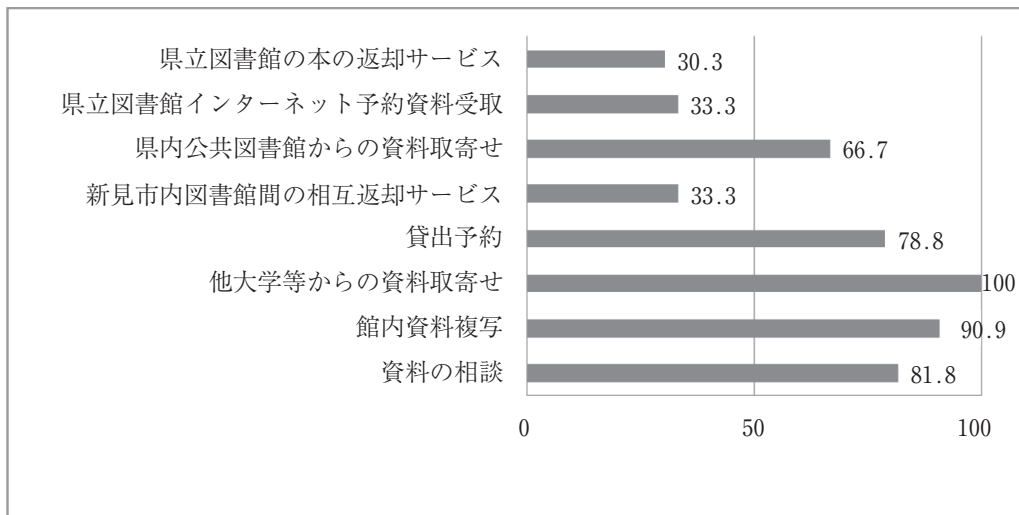


図8 図書館で利用できるサービスの認知度（複数回答，N=33）

次に、図書館にとって大きな情報発信源となっているホームページの利用実態を確認したい。まず、図書館ホームページにアクセスしことがあるか否かを見ると、73.5%の教員が、図書館ホームページにアクセスしたことがあることがわかる。それでは、図書館ホームページにアクセスした際には、どのような内容が利用されているのだろうか。まず、図書館内からアクセスした場合を見ると、「OPAC」が70.8%、「文献情報データベース」が45.8%となっている。館内からのアクセスの場合は、利用したい本や、取り寄せてほしい資料の確認のためにホームページが利用されていると考えられる。

一方、館外からアクセスした場合の利用内容を見ると、「OPAC」が78.3%、「文献情報データベース」が43.5%と、館内の場合とほぼ同じような傾向を示している。ただし、「図書館からのお知らせ」については、館内からの場合は16.7%しか利用されていなかったのに対し、館外からの場合は26.1%の教員から利用されている。このことから、館外から開館日などを確認して、それから図書館に向かうといった利用スタイルが推測できる。しかし、いずれにしても大きな割合にはなっておらず、図書館の内外を問わず、基本的にはOPACと文献情報データベースが利用されているという状況である。ちなみに、昨年末に試験的に導入されたメディカルオンラインは、館内では25.0%、館外では26.1%の割合で利用されていた。

なお、26.5%の教員は図書館ホームページにアクセスしたことがなかった。そこで、ホームページにアクセスしたことがない理由を見ると、「図書館に直接出向けば十分だから」が66.7%、「図書館ホームページがあることを知らなかったから」が33.3%となっている。直接出向けば事足りると思う場合はそれでもよいだろうが、ホームページがあることを知らない教員が少なからず存在する状況は、広報をさらに拡充し、改善されることが求められるだろう。

3. 図書館全体の環境

続いて、図書館全体の環境がどのように評価されているかを見てみたい。館内の環境についての評価を項目ごとに見ると、ほとんどの項目で「適当」、あるいは「適当である」+「まあまあ適当である」を合わせた評価が9割前後に達している。具体的に示すと、「暖房」は「適当」が88.2%、「冷房」は「適当」が93.9%、「静かさ」は「適当である」+「まあまあ適当である」が97.1%、「机、椅子の数」は「適当である」+「まあまあ適当である」が97.1%、「図書館で提供している文献データベース」は「適当である」+「まあまあ適当である」が90.9%、「資料の配置」は「適当である」+「まあまあ適当である」が97.0%、「開館日」は「適切である」が97.1%、「開館時間」は「適切である」が97.0%、「総合的な学習・研究環境としての評価」が「適当である」+「まあまあ適当である」が93.9%であった。ここから、図書館全体の環境は、基本的には適切な水準に保たれていることがわかる。

しかし、問題のある項目も2つ見られた。一つは、「バリアフリー」である。これは、「適当である」+「まあまあ適当である」が78.7%にとどまり、他に比べて低くなっている。具体的に改善すべき点を聞いてみると、「エレベーターが止まっているので不便」「エレベーターの箇所がわかりにくい」などエレベーターに関わるもの、「車椅子利用の方のトイレが実際にご案内すると狭く角度など遣いにくいといわれた」などトイレに関わるもの、そして「学外から来館される場合、高齢者は車がない場合は大変である」など図書館の立地に関するものなどが挙げられた。坂の多い学内のもっとも高台に位置する図書館の立地条件は、容易には改善することはできない。また、トイレの設計など、内容によっては簡単に改善することはできないかもしれない。ただし、改善できる範囲でバリアフリーの一層の進展を目指すことが求められる。さらに、今後の施設改築の際などには、設計段階からバリアフリーの視点を存分に取り入れ

ることも必要となるだろう。

もう一つの問題点は、「館内の明るさ」である。これは、「適当」との評価が50.0%にとどまり、残りの50.0%は「暗い」と評価している。具体的にどこが暗いのかについて尋ねると、大半は「入口」と指摘している。なかには、「エントランスから入口付近を見ると少々暗く閉鎖しているのかと不安になることもありました」という声も聞かれるなど、図書館利用者にとって少なからぬ悪影響を及ぼしていることが推測される。光熱費の節約は重要な課題ではあるが、図書館機能の保全とのバランスを考える必要があるだろう。

4. 図書館についての意見

このように利用され、評価されている図書館であるが、図書館についての意見を、自由記述を基に確認してみたい。まず、利用しやすい点を見ると、「時間が延長され指導しやすくなった」や「休日にも利用できる」など開館時間の延長や土日の開館、「図書の貸し出し期間が長い」「利用者カードに貸し出し状況が書きこまれるのが便利」など貸出期間の長さや利用者カードの仕組み、「静かできれい」「広くてわかりやすい」など施設・設備、「司書等の職員方が丁寧かつ親切である」など司書の方々の対応など、図書館の全般にわたって肯定的に評価されていることがわかる。

一方、利用しにくい点を見ると、一つには「研究室から遠い」など図書館の立地に関わるものが挙げられている。研究室の場所も多様であるため、図書館までの距離にバラつきが生じるのはやむを得ない。ただし、本館2階と図書館1階は非常に近い位置にあるので、「本館2階からもつなげてほしい」との声も聞かれている。出入口を増やすことは安全管理上問題を生じやすいが、そのような状況を踏まえつつ、より通いやすい図書館とすることも求められるだろう。

もう一つは、「研究領域に関連する専門雑誌で蔵書にないものがある」「必要とする電子ジャーナルが契約されていないので利用できない」など、蔵書や電子ジャーナルなどの拡充を求める声が聞かれた。ただし、そのような蔵書面での不足を補うように司書の方々は丁寧かつ迅速に業務をこなしてくださっており、教員たちの評価も高い。

それでは、教員たちはこのような研究面での利用のほかに、教育面ではどのように図書館を利用しているのだろうか。まず、調査や研究の指導においては、「文献検索」「学生と一緒に図書館に行って書籍を探す」「文献資料の取り寄せ」などの形で図書館を利用している。その基礎となる文献検索の手法については、OPACやCiNii、医中誌などの文献検索データベースの使用法を研究室や図書館のパソコンを使って教えているようだ。また、単にこれらの文献検索ツールの技術的な使用方法だけでなく、適切な検索語の用意の仕方や、目的に応じたデータベースの使い分けなど、文献検索ツールを使いこなすための方法を教えている状況もうかがえる。一方、読書指導の面についても、「教員の推薦図書や学生の選書ツアーの本が入口にあるので関心

の持てる本があるのでは、と薦める」「新聞の利用を薦める」など、図書館を活用していることがわかる。

一方、学生たちが図書館に足を運ぶようになったとしても、図書館がより効果を発揮するためには利用者がマナーを守る必要もある。図書館利用上のマナーについては、「私語厳禁」「飲食禁止」「図書の返却期限の厳守」などを指導していることが多い。ただし、「国試対策勉強のときのキャンディくらいは許容範囲にして欲しい」という声もあり、学習環境としての図書館の保全、図書館資料の汚損・紛失防止などとの兼ね合いを考えながら、求められるべきマナーについて、教職員間・学生間の共通理解を形成することが必要となるだろう。

学生への指導における図書館との連携については、「学生に図書への興味を持たせる試み」「授業における連携」「図書館利用マナーの指導」「オリエンテーションの内容改善」などの提案が見られる。それぞれは、具体性の程度もさまざまであるが、学生にとって図書館を利用しやすい場所とするためにも、まずは足を運ばせるような取り組みが必要だろう。

5. 小括

最後に、教員の図書館利用状況についてまとめると、以下の諸点が指摘できるだろう。

第1に、図書館で利用できる資料やサービスの認知度は非常に高かった。他の公立図書館との連携サービスなどはさらに周知が必要だが、基本的には図書館の機能は認識されていると捉えられる。

また第2に、図書館の環境はおおむね高い評価を得ていた。照明やバリアフリーに課題を抱えてはいるが、空調や設備の環境、司書の方々の対応は非常に高い評価を得ていた。

にもかかわらず第3に、教員の利用状況は芳しくなかった。8割以上は週に一度利用するかしないかといった程度であり、利用も専門学術雑誌などに限定されていた。その背景には、「研究領域に関連する専門雑誌で蔵書にないものがある」との声に見られるように、資料の根本的な不足状況が関わっていると考えられる。

しかし、必要な資料は、研究費などで調達しているはずである。その多くは、研究室の書棚におさめられているのだろう。ただ、各自の研究室の書棚を充実させることだけでなく、図書館という公共財の書架を充実させることができれば、各教員だけでなく、利用者すべてにとっても有益なことである。図書館は、自動的に充実していくものではない。教員一人ひとりを含めた、利用者全体でつくり上げるものである。各教員には、自身も図書館づくりの担い手なのだという認識をさらに高め、主体的に図書館の拡充に関わることを求められるのではないだろうか。

VI. 展望

図書館利用についての実態調査の結果から、これからの図書館づくりへの取り組みを述べる。

1. 利用しやすい図書館として

1) 開館の確保と資料の充実

図書館は「大学の顔」とも言われ、学生・教員の学習や研究に大きく影響しその存在の意味は大きい。大学図書館は、利用者が少ないから開けないではなく、学生や教員達がいつでもどの時間でも利用しやすいように開館しておくということがまずは前提であり任務である。24時間オープンや元且しか閉館していないという大学図書館もある。また、今回の調査で、学生の意見の中に開館時間を早めて欲しいや祝日の開館を望む声もある。これは本学の図書館を利用したいという証ともいえ喜ばしいことである。

これからの図書館として電子ジャーナルなどの導入が大きな課題でもある。昨年末に医療関係の電子ジャーナルを試験的に導入したところ、1ヶ月のアクセス数が2,000件に及んだ。興味本位ということもあったかもしれないが期待度が大きいといえる。今回の調査からも図書館利用の上位にあるのが文献検索や文献依頼である。また専門分野の雑誌が少ないという意見もある。パソコン画面からリアルタイムで世界の情報を瞬時に得られる電子ジャーナルへの期待が大きい。新図書館では電子ジャーナルの時代に備えるためにパソコンはすでに準備はしているが、一方、安易に必要な情報だけを求め他の記事には目を通さない。あるいは、紙書籍から遠ざかるという学生たちへの危惧がないわけではない。しかし、選択するのは利用者であり、図書館は利用者が必要とする資料をいかに準備するかであろう。

2) 快適な学習場所として

今回の調査から、学生の図書館利用の大きな目的は学習場所としての図書館であった。主体的に学習する力が学生に望まれている昨今でもあり、その手助けとなるもの一つが図書館であろう。

新図書館は、閲覧座席の増加やグループ閲覧室の設置、冷・暖房など快適な学習空間を作り出す施設・設備として整ったのであるから、経済面での節約はもちろんではあるが、図書館機能として十分発揮できるようにそれらのバランスを考慮しながら、学校中で最も快適な学習場所として提供したい。

最近では、図書館機能の一つとして、静謐な個別学習空間だけではなく、学生同士の議論や共同作業ができる場としてのラーニング・コモンズの構築が望まれるようになってきている。新図書館では無線LANが整備してあり、デジタルと紙書籍からの資料を手元におきながら主体的に学習する場としても可能となる。今後ラーニング・コモンズとしての図書館としての機能も発揮できるとよい。

2. 地域の図書館との連携とPR

新図書館には、新システムとして「岡山県横断検索」や「公立図書館との相互サービス利用」など設置しているが、今回の調査でそれらが十分に活用されていないことがわかった。

読書を推奨している本学にとって、あるいは学生が図書館に足を運ぶことを増やすための手段として、学生の希望する一般書や小説などをさらにそろえることが必要であるのかもしれない。しかし、限られた予算の中ですべての要望に応えることは限界がある。

何よりも新図書館の特徴は、各学科の専門性に応じた資料を準備することに重きをおいて資料を収集していることにあり、その図書館の目的に合わせての資料の収集が必須である。

そこで、公立図書館同士がお互いに連携し、それぞれの長所を活かし短所を補い合うことで、限られた財源の中で図書館サービスにつながればよいのではないかと考える。たとえばベストセラーなどは岡山県横断検索や市内の図書館間の相互返却サービスを利用するなどである。

学術交流センター図書館として一般開放されたことでの長所が活かされていないことは残念である。これらの情報サービスについて、オリエンテーションやPRにつとめ、それらのシステムを利用しながら地域の図書館を活用することをすすめていきたい。ホームページの工夫やblogの開設など時代にマッチしたPR活動も望まれる。

3. 利用者と共につくる図書館

図書館は館長、司書、図書委員会だけがつくっていくものではなく、利用者と共につくりあげていくものだと考える。たとえば、現在本学で行っている学生による“選書ツアー”や教職員の推薦図書を推薦文と共に配架し、また“ねころんぼコーナー”での学生による読み聞かせなど、これらは利用者を巻き込んだ図書館づくりの一端といえる。それらの配架コーナーに利用者が立ち止まり書籍を手に行っていることが多く、貸し出しも増えつつある。また、学生の図書委員を立ち上げている学科もあるが、それらの委員が活動できるような計画を検討することも一つである。

合理化されていく昨今、最初に人員整理されるのが図書館であるなど図書館が置かれている状況は厳しい。大学図書館の合理化は、学生・教員の学習・研究活動に直結し大きな問題となる。文部科学省において、図書館の課題について、学術情報基盤の整備、大学図書館の位置づけや大学図書館サービス機能の強化として、専門的なサービスの提供の充実、図書館業務の専門性等々審議がなされている。認証評価においても図書館は重要な位置づけにある。

今回のアンケートのように利用者の意見を定期的に聞きながら、それぞれの視点や立場でアイデアを出し合い、創意工夫しながら、教職員、学生が丸となって本学附属図書館をつくり上げていきたいと考える。

参考文献

- 1) 名古屋大学附属図書館報「館燈」No.171：名古屋大学附属図書館発行，2009
- 2) 公立大学協会図書館協議会会報第41号：公立大学協会図書館協議会，2010

謝辞

アンケートにご協力いただいた皆様に深謝いたします。

追記

本論文に関するアンケート作成や分析等は，前任期の図書委員会（館長・逸見英枝，委員・新藤慶，金山弘代，吉村淳子，金山時恵，司書・小川政保，仲田みつ，藤野智子）が行った。その中で本紀要に投稿する際には，逸見英枝（はじめに，Ⅰ～Ⅲ，Ⅵを担当），金山時恵（Ⅳを担当），新藤慶（Ⅴを担当）の3名が執筆した。